

柏木教会月報

1月号

東京都新宿区北新宿3-1-18 ☎03-3368-2156 www.church.ne.jp/kashiwagi/

福音のためならば

コリントの信徒への手紙一九章一五～二三節

牧師 大浦 勝

福音のためならば、わたしはどんなこともあります。
それは、わたしが福音に共にあずかる者となるため
です。（二三節）

神はイエス・キリストを救い主としてお遣わしくださり、その十字架と復活によって、神に背き、滅びの道を歩むわたしたちを救し、「自分との永遠の交わりへと回復してくださった。わたしたちはこの恵みによつて罪の赦しを受け、神と共にあずかるものにあづかっている。まことに幸いなことであり、感謝すべきことである。この救いのおとずれは二千年にわたつて、多くの人々によつて担われ、運ばれ、宣べ伝えられてきた。わたしたちは宣べ伝えられた言葉を聞いて信じ、救いにあづかっている。宣べ伝える人がなければ、聞くことは起こらない。聞くことがなければ、信じることは起こらない。信じることがなければ、救いにあづかることも起こらない」（ローマ一〇・一四）。福音を宣べ伝える者がいて、初めてこの救いにあづかる者が起こされるのである。

パウロの時代、十字架につけられたキリストを救い主と宣べ伝えることは「愚かな」ことであった。今もそうかもしれない。しかし、「神は、宣教という愚かな手段によつて信じる者を救おうと、お考えになつた」（イコ

リント一・一一）。そして神は、福音が宣べ伝えられるための時を定めてくださった。キリストの復活から再臨までの現在の時は、神が宣教の働きのために設けられた時である。このように定められた神は、宣教のわざと共に働いて、聞いて信じ、救いにあづかる者を起こすみわざをおこなつておられる。それゆえ、「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」なのである（IIコリント六・一）。

福音は伝えられなければならない。神は福音の恵みにあづかるわたしたちを、福音宣教のわざのために遣わされる。わたしたちは福音の恵みにあづかることと、これを宣べ伝えることを分離して考えるが、これは分離できない一つのことである。パウロは、福音のためにどんなことでもするのは、「福音に共にあづかる者となる」ためであると言う（二三節）。「もし福音を宣べ伝えないなら、わたしはわざわいである」（一六節、口語訳）。

パウロを強い力で促し、福音宣教に駆り立てたのは、福音の中に働いているキリストの愛であつた。キリストはわたしたちすべての者の救いのために、人間となり、苦しみを受け、十字架にかかる死んでくださつた。その人がすでにキリストを知り、信じているかどうかにかかわらず、キリストはその人を愛し、その人のために死んでくださつた。一人一人の背後にキリストがおられる。福音から除外されるべき人はいない。すべての人がキリストの救いの恵みの対象である。まだキリストを知らない人がいるなら、その人にとつて、キリストとその救いの恵みを知ること以上に大切なことがあるであろうか。わたしたちはその人が福音にあづかるためならば、どんなことでもしたいし、またするべきであると考える。